

第80回麻布獣医学会 市民公開講座

「動物の子育てと躰け」 ～獣医師がみた動物の世界～

増井 光子

よこはま動物園ズーラシア園長 麻布大学客員教授

動物園の社会的役割は、娯楽・動物に関する調査研究・生涯学習施設・自然保護や動物保護に関する啓発等であるといわれてきた。いずれの分野に重きを置くかは、時代によって変化する。かつては多くの動物種を収集し展示して一般に供覧することに比重が置かれ、展示種が多い事が動物園のステータスの一つともなった。現在その比重は種の保存事業と環境教育／学習プログラム作りへと移り変わっている。

動物園は従来より動物の繁殖に力を入れてきたが、近年は種の保存の意味からも一層繁殖育成に関心が払われるようになってきた。動物も育てられる環境によって、身体的にも心理的にも影響を受ける。動物園動物はいわば自然界からの預かり物なので、動物種が持つ特徴的な形質は可能なかぎり損うことなく次代へ継承させてゆかねばならない。動物もただ餌を与えているだけでは、おとなになれない。

動物を育てる上で、栄養学的な配慮は不可欠である。それに加えて十分な運動も課さなければならない。野生動物の子供は驚くほど身体を動かしている。その運動が筋腱を鍛え、獲物を狩り、外敵から逃げ果せる身体をつくる。動物園ではややもすると運動不足に陥る。特に人工で育てる場合は体重増加にば

かり目がいって重くなりすぎ、骨や腱の発達とのバランスを欠き、折角の子供が脚を痛める結果となりやすいので注意がいる。

育成上起こる大きな問題は、社会性を身につけさせることである。幼時より単独飼育で同種の仲間の姿を見ずに育ったものや本来群れ生活者なのに、ペアやオス・メスの比率の悪い小群で飼われた場合など、成長後の社会性に、無関心・いじけ・暴力などの問題を生じることがある。集団生活は大切である。動物が本来の動物種としての自覚を持つことは大事なことで、親が育てる場合は親に感化されていくので問題ないが、人手によって育てられた場合は養い親への刷り込みが生じて心理的に不安定となりやすいので、気をつけねばならない。

動物も成長の過程でさまざまな刺激が必要である。例え群れで飼育していても単調な空間では知恵の発達のしようもなく、退屈から悪癖を身につけたりする。動物もQOLは大事で、生活に減り張りをつけるため、ライバルの存在、労働、緊張を強いられる事象なども必要となる。また、動物園動物は野生動物ではないが人が管理している以上、さまざまな処置に対し馴致は欠かせない。